『人文学報』第 115 号（2020 年 6 月）
（京都大学人文科学研究所）

パッタヤー歓楽街の形成
冷戦期タイの都市空間と性的多様性をめぐる予備的研究

日　向　伸　介*

1. はじめに

タイの首都バンコクから南東へ約 150 キロの距離にあるチョンブリー県の特別市パッタヤーは，ビーチリゾートと歓楽街という二つの顔を併せ持つ国際的な観光都市である。1975 年に約 21 万人［国際協力事業団 1976: 12］であった外国人観光客数は 2018 年には 867 万人に達し，全世界の都市で第 18 位の規模を誇っている［Mastercard 2018］。観光地としてのパッタヤーの特性について，世界最大のシェアをもつ旅行ガイドブック『ロンリー・プラネット』のウェブサイト版は次のように紹介している。

> 多文化的なパッタヤーには，宿泊と食事のための素晴らしい場所がいくつもあり，その地域は家族向けのリゾート海岸でもある。しかしながら，町の中心部は南国のパラダイスとはほど遠く，何百ものビアバー，ゴーゴークラブ，マッサージパーラーがひしめき，セックスの首都という評価がもっともふさわしい。残りの大部分は日差しを求める大衆向けの観光産業，老後の生活を送る多くの外国人，そしてほとんど絶え間なく街中を行き交う無数のツアー団体で占められている。パッタヤーでの落ち着いた滞在を望むなら，中心部から離れたところを拠点にすべきである。［lonely planet 2019］

パッタヤーの中心部は，海岸沿いのビーチロードから東方向へ延びる 3 本の幹線道路を基軸として，北／中央／南パッタヤーの 3 エリアに分けて認識されている。なかでも性風俗産業が特に集積する南パッタヤーのウォーキング・ストリート（Walking Street）と呼ばれる通りを歩けば，「セックスの首都（sex capital）」という過激な表現にも得心がいくことだろう。

さらにパッタヤーは，異性愛者の男性をおもな顧客とする性風俗だけでなく，トランスジェ

* ひなた　しんすけ　大阪大学

ンダーの女性によるショーや，その美を競う世界大会であるミス･インターナショナル･クイーン（Miss International Queen），またゲイ男性向けの風俗店が集まるゲイタウンの存在においても知られており，ジェンダーやセクシュアリティの多様性に関連するタイの国際的なイメージの一端を表象する都市でもある。

このような規模と多面性を備えたパッタヤーの歓楽街は，どのような歴史的経緯を経て形成されてきたのだろうか。一般的には，ベトナム戦争期に米軍の保養地として発展したという経緯がよく知られている。だが，パッタヤーの都市形成史に関する実証的な研究は，その知名度からすると意外なほど限られている。そのなかで，おもな先行研究として次の 2 点があげられる。

まず，ビーチリゾートの一般的な開発過程を 8 段階に分類する仮説を提示したうえで，物理的・環境的・社会的・経済的・政治的な要因に着目しながらパッタヤーのビーチリゾート化＝都市化の過程を明らかにしたスミスの研究がある [1)]。スミスによると，1970 年代に急速に発展したパッタヤーは，外貨収入・政府歳入・雇用創出において多大な貢献をする一方，海水汚染や児童売春など環境的・社会的な側面においては看過できない負の影響をもたらした。その主要な原因は，政策上の失敗と，物理的・社会的に現実性をもったリゾート開発計画の欠如であった［Smith 1992: 318-319］。

観光学の見地から都市の構造的な発展に焦点を絞ったスミスの研究に対して，米軍基地との関係，冷戦期におけるタイ政府の観光政策 [2)]，ホテル業界を中心とした地元の民間組織による観光振興活動，そして 1978 年の市制発足に至るまでのパッタヤーの歴史をより詳細に跡付けたのがクワンケーオの修士論文［Kwankaew 2003］である。同論文はパッタヤーの都市形成に関連する具体的な動向にくわえて，ベトナム戦争期におけるバンコクや米軍基地周辺の歓楽街についてもその一端を明らかにしており，資料的価値の高い研究である。結論部においてはスミスと同様，官民による観光客呼び込みの成果として国際的に知られるリゾートに発展したものの，長期的な都市計画を欠いていたことにより，環境的・社会的な問題を引き起こすことになったとしている［Kwankaew 2003: 152］。

くわえて，狭義の学術研究ではないが，タイ政府から依頼を受けた日本の国際協力事業団（現国際協力機構（JICA）の前身のひとつ）が，パッタヤーの観光開発に係る開発基本計画と開発にともなう基盤施設整備計画策定のために 1970 年代後半に実施した一連の調査報告書が残されている［国際協力事業団 1976; 1977 ほか］。これは管見の限り，調査当時のパッタヤーの土地利用状況や観光概況を知るうえで，最も包括的かつ詳細な基礎資料である。

本稿は，上記の研究・資料を参照しつつ，とくに都市形成の黎明期にホテル・飲食店・娯楽施設の開業に関わった人々の記録に焦点をあて，パッタヤー歓楽街の形成史を描き出そうとする試みである。この分野で参照できる一般的な文献資料は皆無に等しいので，流通経路の限られた個人出版物，およびウェブサイト上に散在している情報から再構成を試み，くわえて若干の聞き取り調査をおこなった。調査対象の性質と資料の制約上，基本的な事がらであっても，どうしても個人的な回想のみに依拠せざるをえない点が多かったことをあらかじめ断っておきたい。

構成は次のとおりである。まず第 2 章では，一漁村に過ぎなかったパッタヤーの土地開発が 1940 年代末に始まり，1950 年代にはマリーンスポーツの地，さらに 1960 年代には米軍の保養地として発展していく過程を概観する。次いで第 3 章では，1970 年代の米軍撤退にともない来訪者が多様化した結果，より大衆的な歓楽街の萌芽が形成されていく過程を明らかにする。最後に第 4 章では，1980 年代以降の新たな局面として，パッタヤーの都市性を特徴づける上述のキャバレーショーやゲイタウンの成立過程に着目する。

2. 冷戦・ベトナム戦争期におけるタイとパッタヤー

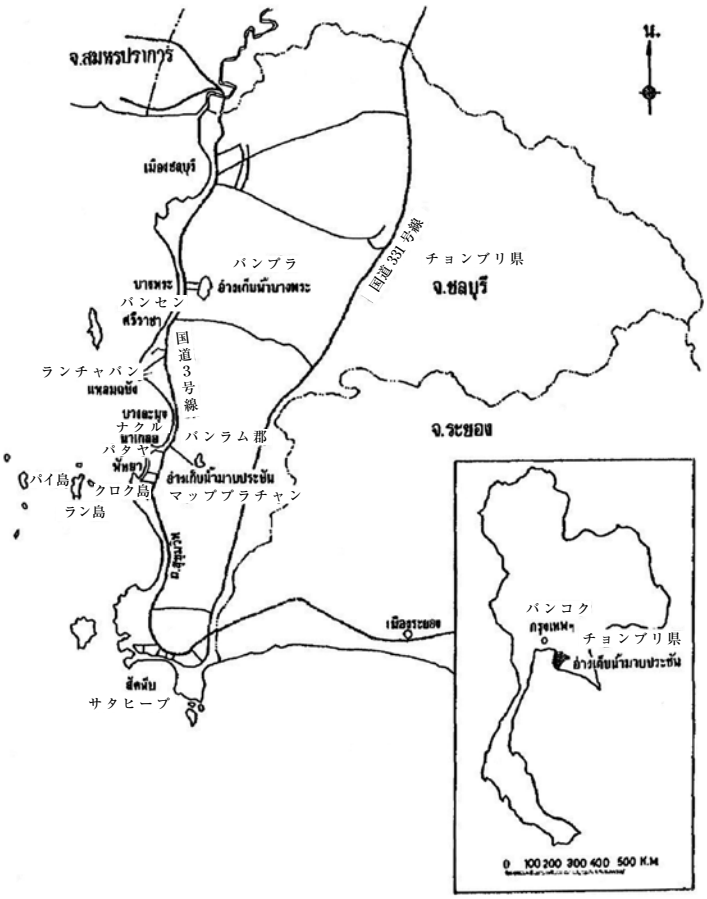
2-1. パッタヤー土地開発のはじまり（1948 ～ 1950 年代）

知人による聞き取りのかたちで残された回顧録［Jonathan（n.d.）］によると，静かな漁村であったパッタヤーの海岸に目をつけて土地を購入し，観光開発をおこなおうと考えた最初のひとりが，バンコク出身の中国系タイ人，パリンヤー・チャワリットタムロン（Parin'ya Chawalitthamrong, 1917 ～ 2005）であった。米軍向けの保養地として宿泊施設が徐々に開業し始める 1950 年代後半以前の土地開発に関する状況は，パッタヤー史において不明な点が最も多い部分である。そのためこの回顧録は貴重であり，上述の先行研究においても参照されていない。ここでは，パリンヤーがパッタヤーの開発に着手するまでの経緯を本人の証言にしたがって概観したい。

パリンヤーは，バンコクのテープシリン高校を卒業後，チュラーローンコーン大学工学部中退，海軍士官学校中退を経て，最終的にタムマサート大学法学部を 1941 年に卒業した。大学在籍中から農務省協同組合局で働き始め，やがて内務省土地局関連の業務を任されるようになった。パリンヤーは土地行政の知識と経験を活かし，1943 年に結婚したブンシリ・ウィーサクン（Bunsiri Wisakun）の父から協力を得て，戦前から妻と共にスクムウィット通りで不動産業を営んでいたという。1951 年に財務省関税局に異動したパリンヤーは，やはり土地活用の事例視察のために香港・フィリピン・オーストラリア・アメリカ・カナダを 1957 年に公務で訪れている。この海外渡航がきっかけであろうか，1959 年に一旦関税局の職を辞してア

メリカのインディアナ大学へ留学し修士号を取得する。帰国後，後述するサリット・タナラット政権（1959 ～ 1963）のもとで 1963 年に新設された国家開発省の副事務次官に請われて就任した。その後，1972 年に工業省副事務次官を務めたのち，定年まで 5 年を残して公務を退いた［Jonathan（n.d.）: 29-31］。

パリンヤーが不動産業を営んでいたスクムウィット通りとは，バンコク中心部からタイ湾東岸沿いに延び，パッタヤーを通過してトラート県のカンボジア国境に至る国道 3 号線（図 1 参照）の別称である。1948 年, 土地購入の視察のために妻と共に初めてパッタヤーを訪れた当時, スクムウィット通りはまだ未舗装の部分が多く，途中のバーンパコン川は渡し船で越えなくて



※原図の一部に鮮明化処理を施した。

図 1　パッタヤー概要図（出典：［国際協力事業団 1976: 7］）

「国道 3 号線」の表記の左下に「パタヤ」が位置している。日本語ではこのように「パタヤ」と表記される場合が多いが，本稿ではタイ語の原音を尊重し「パッタヤー」の表記を採った。1978 年の法令により市制が敷かれパッタヤー特別市となるまで，行政上はチョンブリー県バーンラムン郡（地図上の表記は「バンラム郡」）の一地区に過ぎなかった。

はならなかった。バンコクを8時に出てバーンラムン郡に到着するのは正午頃で，1955年までは海岸に通じる道路さえもなかったので，さらに1時間かけてやっと海に出ることができたという［Jonathan（n.d.）: 19-20］。

具体的な時期は述べていないが，パリンヤーはサムラーン・カーンプラパー（Samran Kanprapha）からパッタヤーの海岸沿い約800,000平方メートルの土地を購入した［Jonathan（n.d.）: 41-42］。購入した理由については，「当時のパッタヤーの土地は価格が安かった。バンコクのスクムウィット通りの土地1ライ（1,600平方メートル）と，パッタヤーの土地100ライ（160,000平方メートル）を交換することができた。そして，バンコクに近い場所でこれだけ長い砂浜があるのはここだけだった」［Jonathan（n.d.）: 23］と述べている。時代的な背景として，パリンヤーが初めてパッタヤーを訪れてからわずか3年後の1951年，船で渡るしかなかったバーンパコン川にテープハッサディン橋が架けられ，バンコクからチョンブリー県へのアクセスが格段に向上した［Umpika 2015: 26］ことも重要であろう。もともと不動産業を営んでいたスクムウィット通りの開発にしたがって，最終的に手つかずのビーチが残るパッタヤーにたどり着いたのである［Jonathan（n.d.）: 38］。

土地を購入したパリンヤーは，まず私費5万バーツを投じて海岸に通じる道路を整備し，ジープで直接海岸まで出られるようにした。その際，ちょうどパッタヤーを管轄していたバーンラムン郡の郡長が大学時代の友人であったことから，郡長の協力を得ることができたという。また，パッタヤーに土地や別荘を持っていた他の人々から資金を募り，ナークルア市場から南パッタヤー地区に至るまでの海外沿いの道路を建設した。これが現在のパッタヤー市街地に造られた初めての道路（現ビーチロード）であり，パリンヤーは土木局長にかけあってこの道路をチョンブリー県の県道に指定してもらった。さらに，道路だけでなく電気もナークルア市場までしか通っていなかったので，パリンヤーは知人であった内務省の事務次官に頼んで電線もパッタヤーまで延伸してもらったという［Jonathan（n.d.）: 23］。

購入した土地のインフラ整備をこのように円滑に進めることができたのは，妻の一族と経営していた会社の資金力にくわえ，パリンヤーが現役の行政官僚として活用することができた人脈に大きく負っていたことがわかる。

パリンヤーがインフラ整備を進めていた1950年代，パッタヤーは次第にバンコク在住の外国人やエリート層に知られるようになっていった。まず，1953年にチョンブリー県にYMCA（キリスト教青年会）支部，翌年にはYMCAのホステルがパッタヤーに設立され，マリーンスポーツ地として認知され始めた［Kwankaew 2003: 48］。さらに1958年2月15日，ウォルター・メイヤー（Walter Mayer）が中心となって南パッタヤーにThe Varuna Marine Clubが設立された。設立メンバーのひとりには，タイにおけるセーリング競技の父（Father of Thai Sailing）として知られ，ヨット愛好家であったラーマ9世王（在位1946～2016）に手ほどき

をした王族のピーサデート・ラッチャニー（Phitsadet Ratchani, 1922～）が名を連ねた［Bangkok Post 2007］。マリーンリゾートとしてのパッタヤーの原型はこの時代に形成されたと考えてよいだろう。

2-2. タイの軍事拠点化と米軍向け歓楽街の形成（1960 年代）

第二次世界大戦後の冷戦構造のなかで反共親米の立場をとったタイ政府は，1950 年に発生した朝鮮戦争には国際連合軍として参戦し，また 1954 年に反共同盟として設立された東南アジア条約機構（SEATO）の加盟国でもあった。1960 年代に入り，ベトナム戦争へのアメリカの軍事介入が本格化すると，インドシナ半島における反共軍事協定であるタナット＝ラスク共同声明（Thanat-Rrusk Communiqué of 1962）がタイとアメリカの間で締結された。この軍事協定に基づき，タイは米軍による北ベトナム攻撃の拠点としての役割を強めた。1964 年 12 月の時点でタイに駐留していた米空軍兵士は約 6,000 人で，使用基地は，距離的にベトナムに近い東北部のウドーンタニー・タークリー・コーラート・ウボンラーチャターニー，および首都圏のドーンムアンであった［CHECO/CORONA 1973: 1-2］。こうした軍事協力の見返りに米軍から援助をとりつけ，強権政治のもとで国内の開発を進めるいわゆる開発独裁を敷いた代表的な政治家がサリット・タナラットであった。このサリット政権は 1959 年に観光振興機構［RKB: vol. 76（28 July 1959）: 273-285］[3] を設立しており，外貨獲得の手段として観光を重視していた。

パッタヤー開発と米軍の関係はつとに指摘されているが，米軍の一団がパッタヤーを初めて訪れたのは，1959 年 6 月 29 日，タイ東北部のコーラートに配属されていた兵士約 500 人が R&R（rest and recreation）休暇でやってきたときのことであったとされている［EMPOWER Foundation 2015: 23; Harborne 2017; Pattaya Mail 2019］[4]。これは，米軍の使用にともない，チョンブリー県に隣接するラヨーン県でウータパオ海軍飛行場の拡張工事が始まる 1965 年より前の出来事であったことに留意しておきたい。パリンヤーによると，兵士たちのために泊まる場所を用意したのは，タイ商業銀行の筆頭理事を歴任したプラチット・ヨットスントーン（Prachit Yotsunthon）の父プラ・ヨットスントーン（Phra Yotsunthon）であった［Jonathan（n.d.）: 69］。

翌 1960 年には，海軍大将で国軍最高司令官やタイ国オリンピック委員会の会長を歴任したタウィー・チュンラサップ（Thawi Chunlasap, 1914-1996）が米軍兵士向けに Nautical Inn を開業した［Nautical Inn 2011; EMPOWER Foundation 2015: 24］。それまでは個人の別荘や簡素なバンガローしかなかったと考えられるパッタヤーでは，客室数 33 部屋という小規模ながら最初期の近代的な一般向け宿泊施設であった。開業当時に建設された 2 階建 3 棟の建築は，現在も客室として使用されている。

次いでパッタヤー初の本格的なリゾートホテルとして Nipa Lodge Hotel（現 Basaya Beach）

が 1964 年に開業した。支配人はドイツ人のクルト・ヴァハトヴァイトル（Kurt Wachtveitl）であった。ヴァハトヴァイトルは 1967 年に The Oriental Hotel（現 Mandarin Oriental, Bangkok）に移籍し，以後 40 年以上にわたり総支配人を務めたことで著名な人物である［The Most Famous Hotels in the World 2007］。Nipa Lodge はホテル名が現在に至るまで 2 回変わっているが，設立時の土地所有者は海軍少将で戦後に首相を務めたタワン・タムロンナーワーサワット（Thawan Thamrongnawasawat, 任期 1946 ～ 1947 年）であり，現在も一族がホテルのオーナーであるという［筆者聞き取り（2019.2.16）］。

1966 年末の時点でタイにはすでに約 24,000 人［CHECO/CORONA 1973: 1-2］の米空軍兵士が駐留しており，その数はわずか 2 年の間に 4 倍に急増していた。そのため，1966 年頃からバンコクには Villa Club や Ers（Nco）Club など，アメリカ人向けのクラブハウスが設置されるが需要をまかないきれず，パッポン通り[5] がアメリカン・タウン化し始める。さらに翌 1967 年からは，ペッブリー・タットマイ通りも米軍兵士およびタイ人向けのナイトスポットとして有名になり始めた［Kwankaew 2003: 56］。このようなバンコク首都圏における繁華街の拡大にともない，日本のいわゆる風営法にあたる「仏暦 2509 年サービス営業法」が 1966 年に制定されている［RKB vol. 83（4 Oct 1966）: 626-639］[6]。他方，パッタヤーから 40 キロほど離れたウータパオ基地周辺には New Land，また軍関係者が多く住んでいたチョンブリー県サッタヒープ郡にも Kilo 10 と呼ばれる米軍向け歓楽街が 1967 年頃には存在していたという［Kwankaew 2003: 99］。

同時期のパッタヤーでは，アメリカ人のエド・ヘッドリー（Ed Headley）とタイ人のスメート・パッタラサートーン（Sumet Phattharasathon）が，バーを備えた最初のレストランである The Outrigger を 1967 年に開業し，翌年にはその北側に姉妹店としてレストラン Coral Reef を開業した。ヘッドリーとスメートは，もともと米軍向けに軍事システムを供給するバンコクの民間企業で働く同僚であった。エンジニアとしてウータパオ支店に派遣されたヘッドリーがパッタヤーに娯楽施設がないことに目を付け，レストラン業を営むことになった。上記の店舗は開店当初，バンコクのエリート向けの高級なバーとレストランであったという［Burchall 2008: 15］。また，同年実施されたタイ政府の調査では，パッタヤーにある飲食店はわずか 2 軒と報告されている［Kwankaew 2003: 59］。

ヘッドリーと親しい友人であったオランダ人のドルフ・リックス（Dolf Riks, 1929 ～ 1999）によると，1969 年当時，パッタヤーには上記の店舗のほかに，ジョージ大佐（Colonel George）が経営するメキシコ料理屋の The Nipa Hut と，アメリカ陸軍の退役軍人であったチャーリー・カタナック（Charlie Cattanach）が経営する Charlie's Hideaway というレストランも存在していた。リックスはオランダ植民地期のインドネシアで生まれ，太平洋戦争中は日本軍の捕虜収容所で 3 年間を過ごしたオランダ人で，家族でスイスに移住するカタナックの

代わりに Charlie's Hideaway を経営するため 1969 年にパッタヤーを訪れた。しかしその数か月後，カタナックとの間に問題が生じたため，1969 年 8 月 24 日，リックスは Dolf Riks Restaurant を別の場所で開業した［Pattaya Mail 1998a］。

ここまで概観したように，バンコクや基地周辺において米軍向けの歓楽街が形成され始めた 1960 年代後半のパッタヤーでは，今日のような風俗営業店を中心とする歓楽街はまだ存在していないものの，リゾートホテルや飲食店が増え始めていたことがわかる。

パッタヤーが次第に賑やかな場所へ変わりつつあった状況は，前節でみた The Varuna Marine Club の動きからもうかがうことができる。もともと王族と関係のあったこのクラブでは，1965 年 3 月にイギリスのエディンバラ公フィリップ（エリザベス 2 世の配偶者）を招いてヨットレースが開催されるなど王室外交の舞台ともなっており，同年 4 月にはラーマ 9 世王の庇護（royal patronage）を受けて Royal Varuna Yacht Club へと改称した［Bangkok Post 2007］。その後，パッタヤーの開発が進んできたという理由で 1967 年 10 月にバリハイ桟橋付近から岬の裏側に移転して現在に至っている［Pattaya Mail 2017］。王室のお墨付きを得た格式の高いマリーンクラブが閑静な環境を求めて移転したというこの動きは，1960 年代後半のパッタヤーの変化をよく伝えている。

3. パッタヤー歓楽街の萌芽と市制発足（1970 年代）

3-1. 米軍の撤退とパッタヤー歓楽街の萌芽

1968 年 3 月 31 日，ジョンソン大統領は北爆の部分停止を宣言し，タイ国内に駐留する米軍もこれにともない退却を始めた。それでもなお 1969 年の時点でタイに駐留していた米軍兵士は 46,277 人［Comptroller General of the United States 1977: 1］にのぼり，同年バンコクのパッポン通りに，タイで最初に成功を収めたゴーゴーバーとされる The Grand Prix Bar & Restaurant が開業した［Morledge 2008］。

同時期のパッタヤーでは，のちに「Mr. Pattaya」として知られるスイス人のアリオス・ファスビン（Alliose X. Fasbind）[7] を総支配人として，ホテル The Royal Pattaya Palace が 1970 年に開業した［Pattaya Blatt 2003a; 2003b］[8]。ファスビンは 1966 年に来タイし，前述の The Oriental Hotel や Narai Hotel でレジデント・マネージャーを務めた経歴をもつ人物であった［Glanzberg 2003: 59］。Narai Hotel 時代からのファスビンの部下で，The Royal Pattaya Palace で会計責任者を務め，後に世界的に有名なキャバレーショーのオーナーとなるスッタム・パントゥサック（Suttham Phanthusak, 1947 ～ 2016）によると，ファスビンはそれまでパッタヤーを訪れることがなかったヨーロッパ人や日本人に対しても積極的に宣伝をおこない [9]，1970 ～ 1972 年の 2 年間でパッタヤーの観光業は急成長したという［Arun 2017: 71-72; cf. 国

際協力事業団 1976: 9]。

ちょうどこの頃，『欲望という名の電車』の著者として知られるアメリカ人作家のテネシー・ウィリアムズ（Tennessee Williams, 1911 ～ 1983）が日本と香港を経由して 1970 年にタイを訪れており，1975 年に刊行した回想録のなかで，「…バンコクの滞在はまるで夢だった。いつかまた見たいと思う夢だ。ここにスペースさえあれば，あのエキゾチックな歓楽について大いに力説したいのだが……」［ウィリアムズ 1978: 396］と語っている。ウィリアムズ自身はバンコクで何をしたのか述べていないが，当時バンコクポスト紙の記者で，タイ滞在中のウィリアムズと親交をもったアメリカ人作家・編集者のエディ・ウッズ（Eddie Woods, 1940 ～）によると，ウィリアムズがバンコクで気に入っていたゲイバーは Eden であり，さらにバンコクだけでは飽き足らず，別の友人とともにパッタヤーへも遊びに出かけていたという［Woods 2013: 53-57］。おそらくこれが，「エキゾチックな歓楽」の中心であったと考えられる。

自身も同性愛者であったウッズは，1970 年代のバンコクが西洋人のゲイ男性にとってどのような意味をもった場所であったのか，次のように述べている。

> バンコクのレストランの西洋人のオーナー，マネージャー，給仕長の非常に多くがホモセクシュアルだった。専門職に就いているヨーロッパ人やアメリカ人が自国ではクローゼットから出ることができないと感じていた時代，バンコクはゲイフレンドリーな都市だった。バンコクでは，彼らはリラックスできて，自分らしくあることができた。オープンに。パッタヤーのあるホテルのオーナーもまさしくゲイであった。レストランを 3 店舗もっていて，彼はそのすべてについて私に〔新聞で〕レビューをしてもらいたいと望んでいた。そこで私がレビューを書けるように，長い週末休暇に私を〔パッタヤーに〕招待したのだった」［Woods 2013: 40］。

この証言から，冷戦期のバンコクが西洋人のゲイ男性にとって一種アジールのような場所であり[10]，そこに集まった人々がバンコクの観光産業の発展に重要な役割を果たしていたことがわかる。

ウィリアムズが帰国した後，バンコクポストの記者を辞めて独立したウッズは，「一緒にパッタヤーでゲイバーを開かないか。あの場所もそろそろ機が熟してきたがまだ一軒もないんだ」［Woods 2013: 90］という友人に誘われ，おそらく 1971 年頃に Camelot というゲイバーを開業している［Woods 2013: 90］[11]。また，同じく 1971 年頃にパッタヤーのバー Ohm's Law[12] で，ビル（Bill S.）という人物のもとで働いていたビル・ジョーンズ（Bill Jones）の証言によると，「バーテンダーのひとりがゲイであったことからそのバーにゲイが集まるようになり，やがて Ohm's Law Gay Bar として知られるようになった。そして隣の通りは Soi Kratoey[13] と呼ばれるようになった」［Pattaya Mail 1998b; 筆者聞き取り（2019.2.15）］。これらの記録を勘案す

ると，1970 年代初頭がパッタヤーにおけるゲイバーの萌芽期であったと考えられる。

1970 年代前半は，パッタヤーが米軍関係者のみならずヒッピーにも知られるようになったという指摘［Harborne 2017］もあるように，観光客の国籍・階層・性的志向が多様化していった時期であり，それと連動するかたちでそれまでエリート向けのレストランやバーに限られていたパッタヤーの娯楽施設も大衆化していったのだと推測される。

その変化を示すのが，1974 年，パッタヤーで最初のパブといわれる伝説的な BJ Bar の開業である。経営者のビル・ジョーンズ（前述）はテキサス州出身のアメリカ人で，アメリカ空軍の軍属（航空エンジニア）として 1967 年より南ベトナムのニャチャンに配属され，それから 4 か月後に R&R 休暇で初めてタイを訪問した。空軍との契約終了後，バンコクの Florida Hotel で歌手をしていたタイ人女性レックと知り合い結婚する。初めてパッタヤーを訪れたのは 1971 年のことで,「南パッタヤーのビーチに寝転んでいると, 砂と海水以外は何も見えなかった。ボートも，大きな港も，観光客も，売り子もいなかった」［Vannisse 2005a: 104］。妻の発案で BJ Bar を開業したとき，パッタヤーで夜間遊びに行ける店は，6 店舗（Fantasy, Sandbox, Dino's, Harbour Light, Hank's Hideaway, Outrigger Piano Bar）存在していたという［Pattaya Mail 1998b; Vannisse 2005b: 105］。

こうしてパッタヤーを訪れる観光客や娯楽の形態が多様化していった時期に，バンコクでは反軍事独裁を掲げる学生運動が大規模デモに発展し，結果としてタノーム・キッティカチョーン内閣が退陣するという 1973 年 10 月 14 日事件が起こり，外国人観光客の減少をもたらす要因となった［Kwankaew 2003: 102］。1957 年クーデタから軍事独裁が続いていたタイは，この 1973 年 10 月 14 日事件からわずか 3 年後に発生する 1976 年 10 月 6 日事件まで短い民主化の時代にあったが，ちょうどその間の 1975 年 3 月 19 日，タイ政府はすでに退却を始めていた米軍を 1976 年までには国内から完全撤退させるようアメリカ政府に要請した。ベトナム共和国の首都サイゴンが陥落するのは，この要請からわずか一か月あまり後の 4 月 30 日であった。パッタヤーに最も近い基地が置かれたウータパオ海軍飛行場も翌 1976 年 6 月 13 日にタイに完全返還された。1975 年時点でタイに駐留していた米軍兵士 27,000 人［Comptroller General of the United States. 1977: 1］が去ったことは，その需要を見込んでいた事業者にとって痛手であったことは想像に難くない。

しかし，その後 1978 年から 1980 年代にかけて，新たに中東の石油会社の従業員[14] やアメリカ海軍の特殊部隊がパッタヤーを訪れるようになり，前述の BJ Bar は最も繁盛したという［Pattaya Mail 1998b］。また，1976 年に 85％を占めていたパッタヤーにおける一流ホテルの比率が 1979 年には 56％まで低下したことや［Smith 1992: 310］，パッタヤー初のゴーゴーバーとして現在も営業を続ける Tahitian Queen が 1978 年に開業していることなどから，1970 年代後半は観光地としてのパッタヤーの大衆化が急速に進んだ時期であったことがわかる。なお，

Tahitian Queen の開店にあたっては，バンコクのパッポン通りの開発者として知られるルワン・パッポンパーニットが資金提供をしており，店内のレリーフもパッポン氏の娘が手掛けたものであるという［筆者聞き取り（2017.9.11）］。ホテル業と同じく，ゴーゴーバーのような風俗営業においても，バンコクの資本と人脈が重要な役割を果たしていたのである。

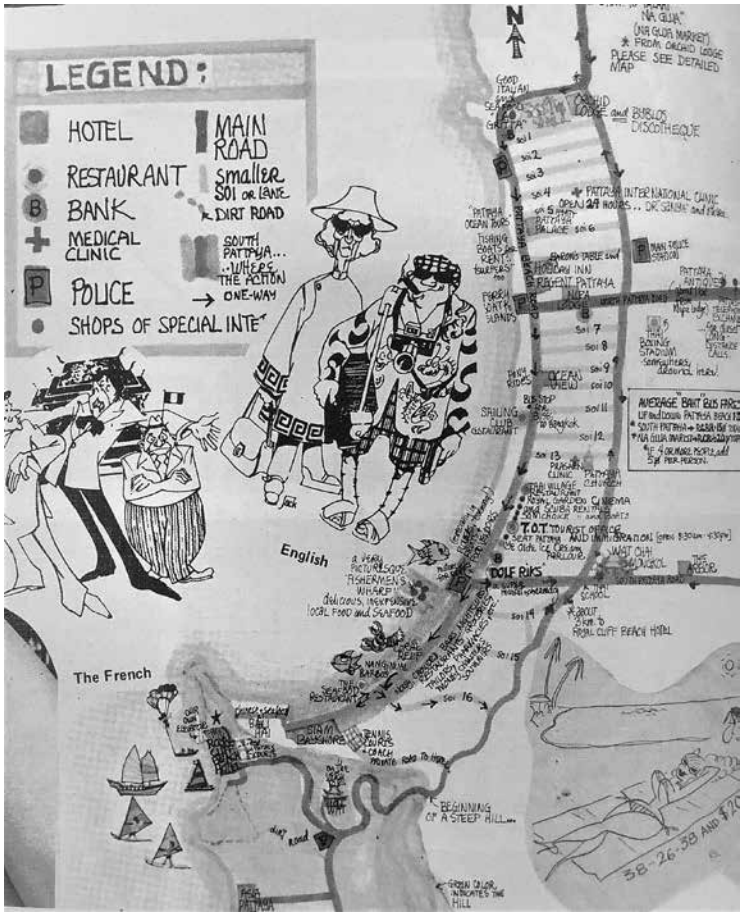


図２　パッタヤー観光地図（1980 年頃）（出典：［Anonymous. n.d.: n. pag.］）

出典は著者・出版年について正確な記載がないが，内容から推測するとパッタヤー市の職員が編集し，おそらく 1980 年頃に刊行されたものであろう。パッタヤー市長の挨拶に始まり，市の収支表，各課の紹介，写真，イラスト等々が雑然と並べられた個性的な体裁の資料である。この地図の作成者も明らかではないが，左下の Royal Cliff Beach Hotel（本稿注 7 参照）に★印が付され，その脇に Our Own Elevator とあることや，ホテルまでの距離を示す記述があるので，同ホテルが作成した観光用の地図であったと考えられる。ビーチ沿いの道から東方向へ平行して延びる 2 本のやや太い道は，上が Norther Pattaya Road（現 Central Pattaya Road），下が Southern Pattaya Road であり，各々の道沿いにホテルの Nipa Lodge，レストランの Dolf Riks が確認できる。また，地図上に記載はないが，ビーチ沿いの道にゴーゴーバーの Tahitian Queen（Soi 13 付近），パブの BJ Bar（Soi 15 と 16 の間）が立地していた（Tahitian Queen は現在も営業中）。

3-2. パッタヤー市制の発足

大衆的なホテルや飲食店が増加し始めていた1970年代後半のパッタヤーは，「観光の中心地として急速に発展してきたが同リゾートは全体的な自然計画，公共投資，開発規制などほとんど行われないまま発展している。その結果同地域の土地利用やインフラストラクチャーは大きな欠陥が生じている」［国際協力事業団 1976: 1］状況に直面していた。とくに問題となったのが環境汚染であり，土地利用計画や上下水道の整備なしに急激に開発された結果，海岸及び海の汚染は著しく，隣接するナークルア地区にあるタピオカ工場の排水が加わり，海水浴場としての機能を失っているようにみえる［国際協力事業団 1976: 8］ほどであった。はじめに参照したスミスやクワンケーオの研究も同様に指摘していたとおり，パッタヤーが都市計画を欠いたまま世界的なリゾート地へと急速に発展したことが原因であった。

この状況を是正するために，1978年10月14日に「仏暦2521年パッタヤー市行政規則法」［RKB vol. 95（30 Oct 1978）: 1-43］が制定され，同法によって初めて「パッタヤー」という名の地方自治体が成立した。制定理由は次のように述べられている。

> 本法を施行する理由は次のとおりである。すなわち，チョンブリー県バーンラムン郡ナークルア衛生区は経済的に急成長を遂げ，タイで最も有名なリゾート地のひとつとなり，タイ人と外国人の観光客が好んで休暇に訪れるようになった。そのため，国家に多大な収入をもたらしている。同地域がこのように急速に発展したことは同時に，社会的，環境的，都市計画的，および建築の規制において問題を引き起こしている。これらの問題は，同地域の住民のみならず，国家の利益と収入，とくに観光産業の推進に影響を与えている。そのため，協力して上記の問題を迅速に解決する方策を探ることが必要である。そこで政府は検討の結果，次のように考えた。すなわち，現在，衛生区という〔統治〕形態は同地域にとって適切なものではなく，地域の経済・社会状況に適合させ，効率的に問題を解決することができるように，同地域の新しい行政規則を制定すべきである。同時に，民主主義体制の統治原理に基づき，地域住民が統治に参加する自治の原則についても考慮すべきである。したがって，本法を制定する必要がある。［RKB vol. 95（30 Oct 1978）: 43］

1940年代からパッタヤーの土地開発をおこなっていた前述のパリンヤー・チャワリットタムロンは当時まだ現役の官僚であり，国家立法議会のメンバーとして同法の制定に直接関わっていた。パリンヤーもまた，「中央政府はパッタヤーが急速に発展し過ぎたことから，郡に帰属しない独立した市を設置すべきであると考えていた。要は，自治権を与え，みずからの税を徴収できるようにするということだ」［Jonathan（n.d.）: 86］と同法制定の理由を説明している。

タイにおける地方行政制度の専門家である永井によると，パッタヤー市は他の地方自治体とは異なり，アメリカ合衆国のシティマネージャー（City Manager）制度を採用し，議会と行

政を完全に分離していた。シティマネージャーは市議会の同意を得てパッタヤー市長と契約を結んだ専門的行政官であり，市長は象徴的な地位に留まり行政権限を持ち合わせていなかった［永井 2003: 282］。この制度自体は現在廃止されているものの，市制発足当初からアメリカの統治制度がいわば実験的に導入されたという点が，タイにおけるパッタヤーの特殊な位置づけを示唆している[15)]。

4. パッタヤー歓楽街の多様化（1980 年代）

はじめに述べたとおり，パッタヤーには，トランスジェンダーの女性による世界的に有名なエンターテイメントや，ゲイ男性向けの飲食店が密集するゲイタウンがあり，ジェンダーやセクシュアリティに関わるパッタヤーの都市性をより多様なものとしている。本節では，それらの施設や地域が生まれた経緯を明らかにしたい。

4-1. ティファニー・ショーの誕生

トランスジェンダーの女性によるキャバレーショーとしてパッタヤー観光の目玉となっている Tiffany's Show の歴史は，ちょうどビル･ジョーンズが BJ Bar を開業した 1974 年，ウィチャイ・ルートリットルアンシン（Wichai Loetritrueangsin）が南パッタヤーではじめたショーにさかのぼる［Tiffany's Show Pattaya（n.d.)］。このショーは，1979 年頃，ホテルの仕事をやめて両替業で成功していたスッタム・パントゥサックとウィチャイと知り会ったことが契機となり，今日のような巨大なエンターテイメントへと変貌していった。

2 人が知り合った当時，バンガローのような小さなホテルを経営していたウィチャイは，そこで 7 ～ 8 人ほどのトランスジェンダーの女性によるキャバレーショーを興行しており，大変人気があったという。しかし駐車に不便な場所にあり困っていたところ，ちょうど前述のパリンヤー・チャワリットタムロンから借りることになった 2,800 平方メートルの土地の用途を思案していたスッタムが声をかけ，新たな劇場を建設することになった。スッタムがバンコク銀行から受けた 1,200 万バーツの融資によって 400 席の劇場が完成したのは，1980 年のことであった［Arun 2017: 83-85］。

ウィチャイは新劇場でプロダクションを担当し，1974 年当初たった一人で舞台に立っていたダンサーのスパープ・セーンカムチュー（Suphap Saengkhamchu）がショーディレクターを務めた［Arun 2017: 85］。

しかし開店当初は客入りが悪く，ウィチャイはもう辞めさせてほしいと懇願にやってくるほどであったという。スッタムはそれでもショーを続けた理由を，次のように語っている。

図３　Tiffany's Show の看板（左）とショーの様子（右）（1980 年頃）（出典：［Arun 2017: 82］）
出典は Tiffany's Show の開業者であるスッタムの葬礼配布本である。写真（左）には大きな看板がふたつ写っているが，上の看板が Tiffany's Show のものである。写真（右）はおそらく開業当初のショーの様子を写したものであろう。

> …もし事業をやめたら，80 人のダンサーの生活はどうなるのだろうか。我々は彼らに対して責任をもたなくてよいというのだろうか。彼らダンサーはアーティストである。しかし，彼らは２番目の種類の女性，あるいは第３の性をもつ人間と呼ばれる人々であり，〔彼らの存在を〕容認できるほど社会はまだ寛容ではない。彼らは普通の人よりも機会の少ない人間である。彼らのダンスという生業は何の害悪もなく，ただ他の人々の心を楽しませるだけである。私の心情としては，機会の限られた人間は機会を享受すべきであり，平等と他者からの同情を得るべきである。彼らも他の人々と同様，国民国家の発展に参画する国民の一人であり，一般の人々とは役割が違うというだけのことである。それは誠実で誰にも害を与えない生業である。くわえて，我々の国にやってくる観光客の心を惹きつけている。彼らはむしろ，国民の仲間たちから，拍手を送られるべきなのではないかと私は考え直している。彼らダンサーこそ，世界中にタイ国を紹介しているのである。［Arun 2017: 85-86］

これは後年の回想であり，1980 年開業当時もスッタムがこのような理路整然とした信念に基づいて経営していたのかどうかは定かではない。しかし，後から脚色された点があるとしても，それまで「第３の性」ともショービジネスとも関りのなかったひとりの実業家が，観光を通した国民国家の発展や国際的な認知度の向上という価値に訴えながら，トランスジェンダーの女性の権利・社会的位置づけを擁護するという論理がわかりやすく披瀝されており，タイ社会のなかで性的マイノリティが置かれた立場についての貴重な証言となっている。

スッタムに土地を貸していたパリンヤーも，それまではカトゥーイ[16]というのは行儀の悪い人たちだと思っていたのでショーには全く関心がなかったが，パッタヤー市長に何度も誘われたので観にいったところ，とても面白く見応えがあり，カトゥーイの演技に感銘を受けたと回想している［Jonathan（n.d.）: 73］。その後，ソムパン・ペットトラクーン（Somphan Phettrakun）という人物が，同じようなトランスジェンダーの女性によるショーのための劇場を造りたいので土地を貸してほしいとパリンヤーのもとにやってきたので貸したところ大盛況

となった。こちらは1981年11月8日に開業したAlcazarという名の劇場で，現在でもTiffany's Showと並ぶ人気を誇っている。

4-2. ゲイタウンの誕生

次いで，パッタヤー初のゲイタウンであるBoyztownが誕生するまでの経緯を，その中心人物であったマイケル・バーチャル（Michael J Burchall, 1946～）が個人出版した自伝資料［Burchall 2008］に基づいて概観したい。

バーチャルはロンドン出身のイギリス人で，チチェスター大学で系図学を専攻し，卒業後は教師を務めた。初めてタイを訪れたのは1985年2月のことで，香港経由で到着した後，バンコクとパッタヤーに滞在した。イギリスに帰国した後もタイのことが忘れられなくなったバーチャルは同年11月にタイを再び訪れ，翌年には経営が行き詰っていたバーを買い取って再開業した。

バーチャルが買い取ったのは，ゲイ男性向けのゴーゴーバーとレストランを備えたCockpit Barであった。Cockpit Barは，前述のThe Outriggerの経営者であったエド・ヘッドリーが4人の仲間とともにYarangという名の会社を設立し，パッタヤーで増えていたゲイ男性観光客の需要に応えるために1982年に開業した店であった。Cockpit Barが開業するまで，パッタヤーを訪れるゲイ男性は，一握りのゲイ専門ではない場所（non-gay places）で楽しむほかなかったという［Burchall 2008: 16］。

前章で確認したとおり，パッタヤーには1970年頃からすでにOhm's Law Gay Barとして知られたバーや，短期間ではあったがエディ・ウッズがゲイ男性向けに開業したCamelotが存在していた。また，1982～2008年のパッタヤーのゲイバーを網羅したリストのなかで，バーチャルは1970年代に開業した店としてTiffany's を唯一とりあげ，パッタヤーで最初のゲイ／ミックスバー（gay/mixed bar）としている［Burchall 2008: 232］。ゲイ／ミックスバーとは，ゲイ男性向けではあるものの，それ以外の性的志向をもつ客にも開かれたバーのことである。当初はゲイバーではなかったOhm's Law Gay Barも，これと似たような性質の場所であったのではないかと推測される。また，ウッズのCamelotは経営が軌道に乗らずすぐに閉店したこと，さらにバーチャルが買い取る前のCockpit Barも休みがちであったことなどから，1970年代～1980年代初めまでのパッタヤーにはゲイ男性向けの飲食店は存在していたものの，ゲイ男性に特化した店はごく少数であり，しかも経営が不安定で流動的な状況であったと考えられる。

1985年2月に初めてパッタヤーを訪れた際，バーチャル自身は南パッタヤーのPattayaland Soi 1（Pattaya Soi 13/3）にあったWhy Not Bar，Gentleman's Bar，Number One Club，Hercules Bar，さらにビーチの北端にあったAdam and Eveという計5店のゲイバーへ遊び

に出かけている[Burchall 2008: 100]。その後, 同年 11 月の再訪時に Club 69 という新しいバーで働いていたナロン（Narong）と運命的な出会いをしたバーチャルは，彼をパートナーとして翌 1986 年 12 月 1 日に上述の Cockpit Bar を再開業した［Burchall 2008: 105, 118］。この Cockpit Bar が立地していた Pattayaland Soi 3（Pattayaland Soi 1 から Pattaya Sai 2 通り沿いに西側へ 2 本目の小道）こそ，後にゲイタウンとして世界的にも知られるようになる Boyztown が形成された場所である。

Boyztown が生まれるきっかけとなったのが，1988 年 12 月 6 日，バーチャルに続いて Pattayaland Soi 3 にゲイバー Boys, Boys, Boys を開業したイギリス人のゴードン・メイ（Gordon May）とジェームス・ラムズデン（James Lumsden）であった。1984 年から頻繁にタイを訪れていた 2 人は，1986 ～ 7 年頃に初めて Cockpit Bar に来店し，バーチャルと知り合うようになった。メイとラムズデンは上述の Gentlemen's Club を 1987 年に買い取って翌年再開業したところ，パッタヤーで最も人気のあるゴーゴーバーとして成功を収めた。そこでビジネスを拡大しようと考えた 2 人が新たに開業したのが Boys, Boys, Boys であった［Burchall 2008: 132-135］。ある日の午後，Pattayaland Soi 3 のバーのオーナーが全員集まって今後どのように協力していくべきか相談をした結果，その通りを Boystown と名付けることになった。名称の発案者はメイであったという［Burchall 2008: 168］。そのミーティングがいつ開催されたのかバーチャルは記していないが，1989 年 8 月に最初の「Mr. Boystown Contest」が開催されていることから［Burchall 2008: 151］，1989 年にはすでに Boystown（後に Boyztown に改称[17]）という名のコミュニティが成立していたと考えられる。

前節でトランスジェンダーの女性によるキャバレーショーをとりあげたが，Boyztown でもキャバレーショーがおこなわれていた。最初のショーは，1987 年 4 月頃，ダンサーの大半がトランスジェンダーの女性からなる劇団を招いて Cockpit Bar でおこなわれたという。だがそのショーが平凡であったため，バーチャルのパートナーであったナロンはみずからショーを手掛けようと思い立ち，1 年後には同店のスタッフによるショーが始まった。そのレベルの高さから評判となり，Tiffany's Show や Alcazar のマネージャーも見物に訪れ，実際にスカウトされてプロのダンサーとなる者までいた。さらに，地元のホテルやパーティ，タイ式の葬式の席にまで余興として呼ばれることがあったという［Burchall 2008: 121, 153-156］。

以上，バーチャルの回想に基づき，Boyztown が誕生するまでのごく基本的な経緯をまとめた。系図学を専攻していた著者らしく記録は細微にわたり，ここでとりあげた他にも興味深い記述が散見される。たとえば Boyz, Boyz, Boyz のラムズデンが中心となって 2001 年に設立されたゲイパレード Pattaya Gay Festival は，もともと第 2 章でとりあげた「Mr. Pattaya」ことルイ・ファスビンのアイデアであったこと［Burchall 2008: 223］や，やはりレストラン経営者として有名だったドルフ・リクスとバーチャルが親しく交際していたこと［Burchall

2008: 119 左頁］などである。また，前述のとおり，1967 年にパッタヤーで最初の本格的なレストランを開業したエド・ヘッドリーが，1980 年代にはゲイバーの経営を試みていたという事実も興味深い。バーチャルの記録は，多様な国籍と性のあり方が交錯する磁場のなかでパッタヤーの都市空間が生まれてきた過程を垣間見せてくれる。

4. おわりに代えて

本稿は，その黎明期において，ホテル・飲食店・性風俗店・エンターテイメント施設の開業に関わった人々の記録からパッタヤー歓楽街の形成史を素描することを試みた。都市の形成過程を便宜的にまとめると，パッタヤーの土地開発は 1940 年代終わりに始まり，1950 年代にはバンコク在住のエリート向けマリーンスポーツ地として知られるようになった。タイ東北部のコーラートに駐留していた米軍が R&R 休暇のため 1959 年に初めてパッタヤーを訪れてから 1960 年代にかけては，米軍の保養地として宿泊施設や飲食店が徐々に増えていった。したがって，一般に理解されているように，米軍基地の存在がパッタヤーの都市化を促した要因であることに間違いはないだろう。だが歓楽街に限ってみれば，米軍向けの場所はバンコクや基地近辺に別に存在しており，1970 年代初頭までは静かなビーチの雰囲気がぎりぎり残っていたパッタヤーとは棲み分けがなされていた。パッタヤーの歓楽街はむしろ米軍の撤退にともなって観光客が多様化した 1970 年代中頃の状況のなかで形成されていったと考えられる。

1980 年代に入ると，観光地としてのパッタヤーの多様性をひときわ特徴づけるトランスジェンダーの女性による Tiffany's Show が開業するとともに，ゲイ男性向けのバーやレストランが集まるゲイタウン Boyztown が形成された。両者は性的マイノリティという点で共通していただけではなく，キャバレーショーを通して人的交流がおこなわれていた。

1970 年代のバンコクはゲイ男性にとって自分らしくいられる場所であり，ホテルや飲食業に関わる西洋人の多くがゲイ男性であったとエディ・ウッズは記していたが，1940 年代から常にバンコクの資本・人脈が中心となって発展したパッタヤーの歴史を考えるうえでも，性的多様性という要素は重要であろう[18)]。パッタヤー歓楽街の形成史としてその歴史の一端を明らかにしたことが，本研究のもつささやかな意義のひとつである。

註

1）　スミスの研究については，中崎［2010］がその概要を紹介し，考察を加えている。

2）　冷戦・ベトナム戦争期におけるタイの観光政策や観光業の発展については，［Porphant 2001; Wantanee 2013; Phillips 2016］らの研究がある。

3）　観光振興機構は 1978 年にタイ国観光庁に昇格［RKB vol.96（4 Nov 1979）: 1-19］して現在に至る。

4）　1959 年から数えて 60 周年にあたる 2019 年 6 月には，音楽フェスティバルをはじめとする記念イベントが催された［Pattaya Mail 2019］。なお，左のパッタヤーメール紙の記事では米兵が初めてパッタヤーを訪れた日を 1959 年 3 月 29 日としているが，［EMPOWER Foundation 2015: 23; Harborne 2017］の記述や記念イベントが開催された月を考慮すると，正しくは 6 月であった可能性の方が高いと思われるので，本稿は後者を採った。

5）　パッポン通りは，バンコクのバーンラック区にある国際的に知られた歓楽街である。海南系タイ人のルワン・パッポンパーニット（Luang Phatphongwanit）によって終戦直後の 1946 年から建設が始まった。

6）　同法は当初プラナコーン県およびノンタブリー県にのみ適用されるものであったが，1968 年の勅令により全国に拡大適用された［RKB vol. 85（12 Mar 1968）: 157-159］。「サービスを提供する場所（Sathan Borikan）」に該当する施設として，（1）ダンスホール等，（2）アルコールやお茶等の飲み物を提供する場所，（3）女性による接客を伴う風呂やサウナ等，（4）公衆の目に触れずアルコール類を提供し，娯楽を提供する女性がおり，22 時以降も営業をおこなう場所の 4 種類が指定された。すなわち，ここでいうサービス営業とは，日本でいうところの風俗営業にほぼ相当するものである。

7）　Alliose X. Fasbind はルイ・ファスビン（Louis Fassbind）という名でも知られている。

8）　1973 年には世界的なホテルチェーンであるハイアットグループに買収され Hyatt Pattaya Palace となった［Pattaya Blatt 2003a; 2003b］。現在は Hotel Selection として当時の建築物がそのまま利用されている。設計は，バンコクの Siri Apartment で知られるタイ人建築家のデーン・ウォンプラサート［Pattayaone（n.d.）］である。なお，ハイアットによる買収をきっかけに，ファスビンは 1973 年に開業した Royal Cliff Beach Terrace（現 Royal Cliff Hotels Group の初店舗，図 2 参照）に同じく総支配人として移籍した［Arun 2017: 72］。

9）　上述のリックスの記録によると，ファスビンがおこなった宣伝活動のひとつは，1971 年にバンコクのホテル Sheraton で開催されたアジア太平洋観光協会（Pacific Area Tourist Association, PATA）への参加であった［Pattaya Mail 1998a］。

10）　第二次世界大戦後～冷戦期のタイ，とくにバンコクにおける西洋人ゲイ男性の社会的位置づけついては，1965 年に起こったアメリカ人男性殺人事件に関する英語・タイ語新聞の報道に着目し，タイにおける「ゲイ」概念の受容過程を論じた［Jackson 1999］に詳しい。

11）　ウッズとロルニックがバンコクでの本業の傍ら経営していたこのバーは，2 人が多忙であったこと，マネージャーの問題，ウッズが選んだ従業員の男性たちがパッタヤーのゲイシーンに合わなかったことなどの理由によって，間もなく閉店したという。また，マネージャーの黒人男性はアメリカ陸軍からの脱走兵であったという［Woods 2013: 90］。

12）　この店名は，従業員がみな電気技師であったことに由来しているという［Pattaya Mail 1998b］。

13）　カトゥーイ（krathoei / kratoey / kathoey）とは，男性と女性以外の性自認（ジェンダー・アイデンティティ）を指すタイ語である。その歴史は古く，19 世紀初頭に編纂された法令集である『三印法典』にも語用がみられる。英語の影響を受けてゲイやトムといった同性愛者を指す表現が広まる以前，カトゥーイは両性具有者，トランスジェンダー，異性装愛好者，同性愛者など幅広い意味

を持っていたが［Sulaiporn 2012: 109-111］，現在ではトランスジェンダー女性（MTF）の意味合いが優勢である。

14） Tahitian Queen の共同経営者のひとりも石油会社の契約社員であった経歴をもち，サウジアラビアに１年ほど滞在していたという。その仕事をしているなかでパッタヤーを知るようになり，自由を求めて石油会社との契約更新をせず，バー経営の仕事を選んだという［筆者聞き取り（2017.9.11）］。

15） タイの地方行政においていまだ強い権限をもつ内務省は，パッタヤー市でシティマネージャー制度を実験的に採用することによって首長の権限をさらに弱め，タイ全土に適用する構想をもっていたとする研究を永井［2003: 307］は紹介している。

16） 本稿注 13 参照。

17） 成立当初は Boyztown ではなく，Boystown という綴りであった。しかし「Boys」という言葉は未成年の少年というニュアンスが強く適切ではないことに間もなく気が付いたため，綴りを変えて Boyztown とした。メイとラムズデンのバーも当初は Boys, Boys, Boys であったが，同様の理由から Boyz, Boyz, Boyz へと同時に改称したという［Burchall 2008: 142, 168］。

18） 戦前～冷戦期のタイ，とくにバンコクにおけるゲイ男性やトランスジェンダーの女性の歴史については，性的マイノリティのアイデンティティ形成において，資本主義・市場経済の国際的な影響と現地社会の既存の文化がどのように関わり合っているのかを論じた［Jackson 2009］に詳しい。

引用文献一覧

日本語－刊行資料

ウィリアムズ，テネシー．1978.『テネシー・ウィリアムズ回想録』（鳴海四郎訳）白水社.

中崎茂．2010.「ビーチ･リゾートの時間･空間変容と観光地域政策の一考察：Russell Smith: パタヤビーチの事例研究を中心に」『桜美林大学産業研究所年報』28: 1-21.

永井史男．2003.『アジア諸国の民主化過程と法：フィリピン，タイ，インドネシアの比較』日本貿易振興会アジア経済研究所，273-310.

英語－刊行資料

Burchall, Michael J. *Boyztown 1982-2008: My Life, and the History of Cockpit Bar, Le Bistro Restaurant and the Story of Boyztown, Pattaya, Thailand*. Chonburi: Self-published by 87 Print Co., Ltd.

EMPOWER Foundation ed. 2015. *This is Us: EMPOWER Foundation Museum of Sex Works in Thai Society*. Nonthaburi: Empower University Press.

Glanzberg, Al. 1993. “Hotel opportunities in Thailand.” *The Cornell Hotel and Restaurant Administration Quarterly* 34(3): 56-59.

Jackson, Peter A. 1999. “An American Death in Bangkok: The Murder of Darrell Berrigan and the Hybrid Origins of Gay Identity in 1960s Thailand.” *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies* 5(3): 361-411.

—. 2009. “Capitalism and Global Queering: National Markets, Parallels among Sexual Cultures, and Multiple Queer Modernities.” *GLQ: A Journal of Lesbian and Gay Studies* 15(3): 357-395.

Phillips, Matthew. 2016. *Thailand in the Cold War*. New York: Routledge.

Porphant Ouyyanont. 2001. “The Vietnam War and Tourism in Bangkok’s Development, 1960-70s.”

Southeast Asian Studies 39(2): 157-187.

Smith, Russell Arthur. 1992. "Beach Resort Evolution: Implication for Planning." *Annals of Tourism Research* 19: 304-322.

Sulaiporn Chonwilai. 2012. "Kathoey: Male-to-Female Transgender or Transsexuals." In *Thai Sex Talk: The Language of Sex and Sexuality in Thailand, edited by Pimpawun Boonmongkon and Peter A. Jackson, translated by Timo Ojansen*, 109-117. Chiang Mai: Mekong Press.

Vannisse, Marc. 2005a. "A Barely Visible Dot on the Map." *Thailand Timeout* 7(81): 104-105.

—. 2005b. "The Man with Lady Luck on his Side." *Thailand Timeout* 7(82): 104-105.

Wantanee Suntikul. 2013. "Thai tourism and the legacy of the Vietnam War." In *Tourism and War*. Edited by Richard Butler and Wantanee Suntikul. London: Routledge, 92-105.

Woods, Eddie. 2013. *Tennessee Williams in Bangkok*. Rhode Island: Inkblot Publications.

タイ語－刊行資料

Anonymous. n.d. *Mueang Patthaya 2522 lae 2523*. Chonburi: Kamonsinkanphim.

Arun Sampuntbawiwat ed. 2017. *The Legendary Life of a True Scout*. Bangkok: Amarin Printing.

Jonathan ed. n.d. *Tam Roi Tamnan Mueang Phatthaya kap Parin'ya Chawalitthamrong: Phu Phalikfuen Phaendin Mueang Phatthaya*. Bangkok: Amarin Printing.

Umpika Sawatwong. 2015. "Thanon Sukhumwit kap Kankhayaitua khong Kitchakam tang Setthakit nai Phumiphak Tawanok khong Prathet Thai chuang Thotsawat 2480-2520." *The Thammasat Journal of History* 2 (1): 13-63.

タイ語－未刊行資料

Kwankaew Udomboonyanuparp. 2003. *Kamnoet lae Kankhayaitua khong Mueang Phatthaya*. Unpublished M.A. Dissertation, Chulalongkorn University.

タイ語－官報

RKB (Ratchakitchanubeksa) vol. 76; 83; 85; 95; 96.

オンライン資料

国際協力事業団. 1976. 『タイ国パタヤ地区基盤整備計画事前調査』
Accessed on Aug 1, 2019. http://open_jicareport.jica.go.jp/pdf/10502706.pdf

—. 1977. 『タイ国パタヤ地区基盤整備計画調査報告書』
Accessed on Aug 1, 2019. http://open_jicareport.jica.go.jp/759/759/759_122_10502748.html

Bangkok Post. 2007. "The Royal Varuna: 50 years young."
Accessed on Aug 1, 2019.
https://www.pressreader.com/thailand/bangkok-post/20070701/282595963499919

CHECO/CORONA Harvest Division, Directorate of Operations Analysis, HQ PACAF. 1973. "Project CHECO Report: Base Defense in Thailand." (a former confidential document declassified in 1999)
Accessed on Aug, 2019. 1. http://www.dtic.mil/dtic/tr/fulltext/u2/a586193.pdf

Comptroller General of the United States. 1977. "Withdrawal of U.S. Forces from Thailand: Ways to Improve Future Withdrawal Operations." (Unclassified Version of GAO's Secret report LCD-77-402, dated June 3, 1977)

Accessed on Aug 1, 2019. https://www.gao.gov/assets/130/120410.pdf
Harborne, Ben. 2017. "Pattaya: Where it all began!"
Accessed on Aug 1, 2019. https://lovepattayathailand.com/pattaya-history/
lonely planet. 2018. "THAILAND: Pattaya is accessible seaside fun."
Accessed on Aug 1, 2019. https://www.lonelyplanet.com/thailand/chonburi-province/pattaya
Mastercard. 2018. "Big Cities, Big Business: Bangkok, London and Paris Lead the Way in Mastercard's 2018 Global Destination Cities Index."
Accessed on Aug 1, 2019.
https://newsroom.mastercard.com/press-releases/big-cities-big-business-bangkok-london-and-paris-lead-the-way-in-mastercards-2018-global-destination-cities-index/
Morledge, William R. 2008. "Grand Prix: Revisiting an Historic Bangkok Bar."
Accessed on Aug 1, 2019. http://www.bangkokeyes.com/2008nov01.html
Nautical Inn. 2011. "Information."
Accessed on Aug 1, 2019.
http://www.nauticalinn.co.th/home/index.php?option=com_content&view=article&id=1&Itemid=3&lang=en
Pattaya Blatt 2003a. "Das Pattaya Palace Hotel erwacht zu neuem Leben."
Accessed on Aug 1, 2019. http://www.pattayablatt.com/060/Feuilleton.shtml
Pattaya Blatt 2003b. "Die Legende des Pattaya Palace Hotel."
Accessed on Aug 1, 2019. http://www.pattayablatt.com/060/Feuilleton.shtml
Pattaya Mail. 1998a. "Another Pattaya Icon Passes On."
Accessed on Aug 1, 2019. http://www.pattayamail.com/304/continue.htm
—. 1998b. "Bj Bar – the end of an era."
Accessed on Aug 1, 2019. http://www.pattayamail.com/295/features.htm
—. 2002. "Many local dignitaries pay final respects to one of Pattaya's "original" city fathers."
Accessed on Aug 1, 2019. http://www.pattayamail.com/455/news.shtml
—. 2017. "Royal Varuna Yacht Club celebrates 60 years of sailing history and tradition."
Accessed on Aug 1, 2019.
http://www.pattayamail.com/ourcommunity/royal-varuna-yacht-club-celebrates-60-years-sailing-history-tradition-193390
—. 2019. "June events commemorate U.S. military's discovery of Pattaya."
Accessed on Aug 1, 2019.
https://www.pattayamail.com/news/june-events-commemorate-u-s-militarys-discovery-of-pattaya-251032
Pattayaone. (n.d.). "Selection."
Accessed on Aug 1, 2019. http://www.pattayaone.com/thepattayabeachresort.html
The Most Famous Hotels in the World. 2007. "Kurt Wachtveitl - 40 years with The Oriental."
Accessed on Aug 1, 2019. http://www.famoushotels.org/article/717
Tiffany's Show Pattaya. (n.d.). "The Legend."
Accessed on Aug 1, 2019. http://www.tiffany-show.co.th/legend.html

附記　本稿は，日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）（2016-2018）「東南アジアにおけるLGBTの比較政治研究」（代表：日下渉）の研究成果の一部である。執筆にあたり，日本タイ学会第20回研究大会（2018年7月8日），A Workshop on LGBT Politics in Southeast Asia and Japan（2018年10月28日），および東南アジア学会研究集会・九州地区特別例会（2019年7月21日）において口頭発表をおこない，有益なコメントをいただいた。ここに記してお礼申し上げたい。

要　旨

タイ中部チョンブリー県の海岸沿いに位置する特別市パッタヤーは，世界でも有数のビーチリゾートとして知られている。本稿は，その黎明期において，ホテル・飲食店・性風俗店・エンターテイメント施設の開業に関わった人々の記録から，パッタヤー歓楽街の形成史を素描することを試みた。

パッタヤーの開発は，バンコクの官僚・実業家であるパリンヤー・チャワリットタムロンによって1940年代後半に着手され，1950年代にバンコク在住のエリート向けマリーンスポーツ地として知られるようになった。ベトナム戦争期に入るとタイ東北部に駐留していた米軍がR&R休暇のためにパッタヤーを訪れるようになり，1960年代には米軍の保養地として宿泊施設や飲食店が増加したが，1970年代に入ると米軍の撤退とともに観光客の多様化と大衆化が進んだ。しかし歓楽街に限ってみれば，米軍向けの場所は基地近辺に別に存在しており，1970年代初頭までのパッタヤーには静かなビーチの雰囲気が残されていた。その後，ビル・ジョーンズがパッタヤー初のパブBJ Barを開業し，ウィチャイ・ルートリットルアンシンがトランスジェンダーの女性によるキャバレーショーを始めたのが同じ1974年であることから，パッタヤー歓楽街の萌芽期は1970年代中頃と推測される。

1980年代に入ると，両替業で成功していたスッタム･パントゥサックが，ウィチャイの経営するキャバレーショーに投資をおこない，Tiffany's Showとして1980年に開業した。また，後にゲイタウンBoyztownの中心人物となるマイケル・バーチャルがゲイ男性向けのゴーゴーバーCockpit Barの権利を買い取って1985年に再開業した。両者は性的マイノリティという点で共通していただけではなく，キャバレーショーを通して人的交流がおこなわれていた。

劇作家のテネシー・ウィリアムズと親交のあったエディ・ウッズは，1970年代のバンコクはゲイ男性にとって自分らしくいられる場所であり，ホテルや飲食業を営む西洋人の多くもゲイ男性であったと指摘している。バンコクの資本・人脈のもとで発展を遂げたパッタヤーの歓楽街も，性的多様性を内包しながら形成されてきたのである。

キーワード：タイ，パッタヤー，冷戦期，観光，歓楽街，性的多様性

Summary

This paper attempts to provide an historical outline of the entertainment district of Pattaya, a world-famous resort city in the Chonburi Province of Thailand, with focuses upon individuals who played important roles in Pattaya's hotel, restaurant, sex and entertainment industries during its early periods.

The development of Pattaya was initiated in the late 1940s by Parin'ya Chawaritthamrong, a Bangkok-born bureaucrat, who was also known for his real estate business activities in the Sukumvit area. In the 1950s, Pattaya started to become known as a marine sports destination for Bangkok elites - including the Thai royal family.

The arrival of U.S. soldiers in 1959 led to an increase in hotel and restaurant developments. This increased Pattaya's attraction as a rest and recreation (R&R) destination through the 1960s. The presence of the U.S. military bases was the main factor that promoted the urbanization of Pattaya. However, despite this, and in contrast to other entertainment districts in Bangkok and around military bases, Pattaya retained a quiet beach atmosphere until the early 1970s.

Tourist nationalities diversified during the mid-1970s in reaction to the U.S. military's withdrawal from Thailand. During this period Pattaya's origins as an entertainment district likely began and is exemplified by the opening of several notable establishments. During 1974, Bill Jones opened BJ Bar, the first pub in Pattaya, and Wichai Loetritrueangsin started a transgender women's cabaret show.

In 1980, Suttham Phanthusak, a successful foreign exchange entrepreneur in Pattaya, invested in Wichai's transgender show. The show gradually developed into the internationally renowned Tiffany's Show. Meanwhile, Michael Burchall bought the Cockpit Bar, a go-go bar and restaurant for gay men, and reopened it in 1985. Other bars and restaurants were subsequently added to the same street where the Cockpit Bar was located, and around 1989, the bar owners decided to name the street Boyztown - the first

gay town in Pattaya.

Eddie Woods, an American writer who used to work for a newspaper in Bangkok, pointed out that Bangkok "was a gay-friendly city, at a time when most gay European and American professional people felt unable to come out of the closet at home. In Bangkok they could relax, be themselves. Openly." Pattaya's entertainment district, which continuously developed alongside Bangkok's capital and human network, also formed its urban space with gender and sexual diversity.

Keywords: Thailand, Pattaya, Cold War Period, Tourism, Entertainment District, Sexual Diversity